

遙かなる風雪

実録・柴田音吉洋服店

10

新緑の季節——創意と信念の生涯終る

「柴田音吉洋服店技術部出身」ナンノタレベエという名刺を堂々と作り、結構商売をしていた男がいた。ニセ者である。

肩書きを「出身」としたところが泣かせる。いまでいう「有名税」。ニセ者出現で柴田の名はまた上ったから妙だ。

× ×

大正の中ごろ、栗原某という職人が柴田の店にいた。腕も立ったが親分肌で、後輩にも花街の女たちにも人気があった。仕事へのやる気がみなぎっている彼を、音吉はある日呼んでいった。

「どうだ、ヨーロッパに行ってみないか」。

そのころの職人の例にもれず、小学校しか出ていないこの青年は目をパチパチさせて口ごもった。何のことやら皆目わからなかったからだ。伝え聞くヨーロッパは遠い国である。政府派遣の留学生は、彼ら職人たちにとって「雲の上の人」でしかない。

その留学生と同じようにロンドンで勉強してこい、金は出すという音吉に、彼がびっくりして声も出ないのは無理ない話だった。

英語のエの字もわからない

彼栗原某は、かくして3等船室の赤毛布にくるまって唐人の国におもむく。しっかりと抱えたトランクには越中フンドシがギッシリつまっていた。

ロンドンの名門、テーラー&カッター研究所に籍をおいた彼は、「あきれたことに」最優秀の成績表と卒業免状をもってケロリと帰ってきた。

英語はカラキシうまくなかったが、製図や割出しに言葉は要らなかったらしい。

まだ日英同盟(1902~1921)が破棄される前だった。

このほかにも、柴田の職場を離れてから単独でアメリカに渡り、帰ってから独立して店を開いた男もいた。

× ×

このころ、柴田忠は再びヨーロッパへ渡った。

忠は彼地の洋服店で黙々と修業しているひとりの日本人と知り合った。

越後の人間で、男一匹志を抱き、親からも金をもらわず独力で渡航したという。

柴田の店に来て欲しいという忠の言葉に、彼はうなずき、ロンドンを後にした。いま柴田音吉洋服店の工場長を勤める白崎皓介さんの父がその人であった。

こうした西欧の技術の洗礼を受けた人びとを中心に、柴田の洋服は、かつての「着やすい服、——和服から洋服への過渡期——から、より技術の優れた服へ、熟成の道を辿っていった。

× ×

大正12年5月27日、新緑を目の底に、柴田音吉は70才の大往生を遂げた。

若いころからの「新しがりは、晩年に至ってもなお衰えず、周囲を驚かし続けたあるとき、何かの機会に寝



晩年の柴田音吉(大正中期)

たベッドがすっかり気に入り8畳の座敷に特別製のベッドを入れさせた。

その傍に和風の布団を敷き丸まげに木台の高枕で夫人が寝るという構図は、周囲の微笑を誘った。

手洗所もいち早く水洗式に変えた。

書に関心が深かった。自分では下手だと思ひこみ、「60の手習い」を続け、添作をよろこんで受けた。

よく働き、よく遊んだ。夕食が済むと1時間ほどひと眠りし、又起きて働く。これには弟子たちが閉口した。

その間には洋服づくりについての幾多の創案があった。田中治三郎さんが技術を「盗んだ」。上衣裏ポケットのフラップの型もそのひとつである。後を託すにふさわしい忠の秀才ぶりを見届け、名声を得たいことをした充実の生涯であった。高野山に分骨、杉木立のなかにひとびとの手で碑が建立された。

その後いまに至るまで、この聖地は柴田につながるひとびとに、心の安息をもたらし続けている。(つづく)

岡 和子記者



高野山に建立された碑